

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第六十一回）

しか

万葉にうたわれた「志賀」

・志賀は博多湾の北部、福岡県福岡市東区に所属する周囲12キロ余り、南北四キロ、面積5・87平方キロの小島を指す。

・志賀島のしかのしま東北部は玄海灘の風波が荒く、南西部は波がおだやかな博多湾に面している。

・昔、志賀島は島であったが今は右手の突端部は握りこぶし状に突出し本土から約12キロ延びた砂浜「海の中道」により陸続きとなつて、玄界灘の荒波から守るように博多湾を抱きかかえているような形で取り囲んでいる。

・志賀島は古代、日本の大陸・半島への玄関口であるとともに九州を治める役所であった大宰府の外港である那大津なのおおつ（博多）の正面に位置する。

・この島は、福岡・博多の歴史と密接な関係にあり、西暦57年中国の後漢の皇帝からなこく奴国の使者に贈られたという国宝「金印」の発見地、神功皇后伝説に因んだ地名、千八百年以上の歴史を持つ海上の神様として信仰されてきた志賀海神社創建の由来、蒙古襲来にまつ

わる史跡、さらに大宰府の官人らが詠んだ二十三首の万葉故地があるなど、この島が神話と悠久の歴史を感じさせる宝庫となっている。

・万葉集には次の万葉歌の詠人・石川君子が、神亀年中じんきに大宰少弐ださいのしょうじ（大宰府の次官）として赴任したが、その在任中に志賀の海人（女）の多忙で荒くれた日常生活の物珍しい姿に興味を寄せての作である。うとの説がある歌がある。

あまめ

1) 志賀の海人は 藻刈り

いとま

くしげ

塩焼き 暇なみ 櫛笥の

まぐし

小櫛 取りもみなくに

巻三―278 作者：石川君子いしかわのきみこ

（解説）

・志賀島の海人（女）は海藻を刈ったり塩を焼いたりして暇がないので、櫛箱の櫛を手にとってみることをさえもしはしない。

・「海人（女）」は、海で魚や海藻を採ったり、海藻を焼いて塩をとったりして生活している女性を呼ぶ。

・「め刈」のメは食用の海藻の総称でワカメ、アラメ、ニキメなどの総称をいう。

・また、これら海藻に海水を注いで焼く製塩法があった。

・「櫛笥」は髪をといたり、髪を飾ったりする「くし」をいれる箱。

・製塩の仕事は激しい労働であつたらしくこの歌は身なりをととのえる余裕もない海人たちの姿をよく示している。

・また、作者・石川君子はこれも志賀の海人の「物に寄せて思いを述べる歌」の中で次の歌を詠んでいる。

しか あま けぶり

2) 志賀の海人の 煙焼

から

きえて 焼く塩の 辛き

われ

恋をも 我はするかも

卷十一—2742 作者…石川君子

(解説) 志賀の海人が煙を立てて焼く塩のように辛い恋、つらい恋を

私はしています。

・参考文献

林田正男著「万葉の歌」新潮日本古典集成「萬葉集」他

(写生地)

志賀島の北西部端に位置し古代に海人たちが、この地で海藻を採集しただろうと思われる勝馬海岸の最北端にある志賀海神社の摂社「沖津宮」が祀られている小島と海岸風景を描く。(杏花)



(位置図)

志賀島周辺の位置図



・写生地の勝間海岸へは博多埠頭より「市営渡船」で所要時間約三十分で着く。